

「星の流れに」

21歳の従軍看護婦が、中国奉天から命からがら引き上げ船で舞鶴にたどり着いた。必死の思いで東京へ。家もない、家族も誰もいない。毎日上野駅地下道で蕙（むしろ）に包まれて寝起きする食うや食わずの毎日。ある時握り飯二個を恵んで呉れた男に身を任せ、それを界に「闇の女」に身を投じて行った。この経験を昭和21年（1946年）8月29日毎日新聞「建設」欄へ「顛（てん）落するまで」という題で投書した。

これを読んで衝撃を受けた作詞家星野みのるによって生まれたのが、有名な「星の流れに」だ。菊池章子が、昭和22年に歌って大ヒット曲となった。

星の流れに 身を占って
何処をねぐらの 今日の宿
荒（すさ）む心で いるのじゃないが
泣けて涙も涸れ果てた
こんな女にだれがした

二番略

飢えて今頃 妹はどこに
一目逢いたい お母さん
唇紅（ルージュ）哀しや唇かめば
闇の夜風も泣いて吹く
こんな女にだれがした

痛烈に戦争責任を問うている歌だ。

戦争責任については、専門家による多くの著書がある。投稿者は、ここにあらためて語れる程、先人達の論評を体系的網羅的に整理・理解できていないわけではないし、その能力も無い。ただ、知りうる限りでは軍部を含め支配層による国家統制下で、命をかけた反対者は少なからずいたものの、国民の殆ど全てが戦争推進の賛同者ないしは主体であったことも事実だった。私事だが、伯父は職を賭して反対した一人で、結局懲役4年服役後、昭和39年59歳で業病死するまで悲惨だが誇り高い人生を全うした。手のひら返しの体制変化に冷徹な批判の目を向け、真の民主国家形成を願いつつ。

戦後「国民は国家に騙された」という風潮が大勢を占めるなか、伊丹万作は自戒を込めながらも「騙される側も悪い」と鋭く指摘している。

さて、ここで歌われている「こんな女に誰がした」、山本薩夫監督で昭和23年（1948年）映画化もされた（岸旗江主演）。戦争で人生を弄ばれた女性を描いた邦画反戦映画として、成瀬巳喜男監督、高峰秀子・森雅之主演「浮雲」とともに、名作として伝えられて来ている。

洋画では1970年ヴィットリオ・デ・シーカ監督「”ひまわり”・ソフィア・ローレン、マルチェロ・マストロヤンニ（音楽・ヘンリー・マンシーニ）」、1964年ジャック・デウミ監督「”シェルブールの雨傘”・カトリーヌ・ドヌーブ（音楽・ミシェル・ルグラン）」、1952年ルネ・クレマン監督「”禁じられた遊び”・ブリジット・フォセー（音楽・ナルシソ・イエペス）」など、いずれも反戦映画の傑作だと思う。戦争によって不条理な別れを強いられる男女の顛末が描かれている。流れているテーマ音楽も秀逸。

大戦後、これら時代を超える名画が造られた背景はなんだったのだろうか？
当時は世の中全体が、直接間接を問わず戦争体験者だった。この経験が、社会を斬る感性・使命感を持ち合わせた映画人らの原動力となり、歴史に残る名作が生み出された。

ところで今この瞬間も、知性・感受性・思いやりが欠落し、且つかつての大戦を経験していない独裁者らによる悲惨な殺戮が続いている。暗澹・陰鬱な気持ちになる。戦いを命じる側も、毎日続く惨状を種々媒体で見る側も「テレビゲーム」感覚なのだろう。手段は益々残忍酷薄化し、被害者の大半は何時の世も弱者である。独裁者らは「宗教的」「人権的配慮」「歴史的怨念」云々、直接ないし間接的にその正当性を主張しているようだが、つまるところは「領土」「資源」を巡る争いに他ならず、彼らの主張に正義は皆無である。憎しみは憎しみを呼び、争いは永遠に続くだろう。

2026年7月 小松 泰彦